

群馬大学国際教育・研究センター論集第12号別刷

2013年3月

群馬大学桐生キャンパスの日本語教育の現状

俵 山 雄 司

〔寄稿論文〕

群馬大学桐生キャンパスの日本語教育の現状

俵 山 雄 司

要 旨

工学部・工学研究科の学生は、日本語学習経験ゼロの初心者から、日本で就職を目指す上級者までおり、日本語レベルの幅は広い。これに対応して、桐生キャンパスには、レベル別5コースに、BJ(ビジネス日本語)コースを合わせた計6コースが設置されている。コースの共通目標は、「コミュニケーションの相手に不快感を与えずに効率的に伝達の目標を達成することができる言語能力・副言語能力の養成」である。授業以外にも実験やゼミに時間を取られ、予習・復習が難しいという状況を克服するため、コーディネーターや授業者は工夫を凝らしている。具体例として、「授業内に復習の時間を潤沢に取ったデザイン」「自律的な学習態度を養成するデザイン」の2つを紹介する。最後に、コースの充実が、学生の快適な生活や学生獲得にもつながっていることを述べる。

1. はじめに

群馬大学は、県内の3市に4つのキャンパスを持つ総合大学である。前橋市に、荒牧(本部・教育学部・社会情報学部、1年次教養教育)、昭和(医学部)の2キャンパスがあり、桐生市と太田市には工学部の2キャンパスがあり、それぞれに留学生を抱えている。なかでも、工学部は、留学生数が多く、全留学生266名(2012年3月1日現在)のうちの約7割にあたる187人が在籍している。太田キャンパスには日本語コースがないため、桐生キャンパスでは、桐生・太田両キャンパスの学生を相手にすることになり、潜在的な学習者の数は最も多い。

2. 学習者の背景

桐生キャンパスの学生は、専門が工学系であるため、文系学部のある荒牧キャンパスの学生と比べると、日本語力は相対的に低めである。しかし、一方で、日本語学校で日本語をしっかりと勉強し、日本語能力試験N1に合格している学生も少なくない。そのため、桐生キャンパスの学生には、日本語学習経験ゼロの初心者から、高い日本語力と確かな専門知識を生かして日本企業に就職を目指す上級者までがあり、日本語レベルの幅は広がっている。

ここで、学部生・修士学生・博士学生という属性別に、桐生キャンパスの学生の特徴を見る。まず、学部生であるが、数は40%程度を占めている。最も多いのは、マレーシア政府派遣の留学生たちで、各学年に5～10人程度在籍している。それに次ぐのがベトナムや中国からの学生であるが、近年は、様々な国籍の学生が専門学校や高等専門学校から3年次に編入してきている。学部留学生は一般的に朝から夕方までびっしり専門科目のスケジュールが詰まっていることが多く、なかなか日本語コースへの出席は難しいが、近年は時間に多少余裕が出てくる4年生の参加が目立っている。

次に、修士学生であるが、数は30%程度を占めている。日本語のレベルは多様であるが、国籍は中国が圧倒的に多く、それにベトナムが続く。日本語学習に熱心な学生も多く、桐生の日本語コース出席者のコアとなるのがこの学生たちである。また、日本企業への就職を目指す学生は、ビジネス日本語やビジネス日本事情といった就業後・就職活動を見据えたクラスにも盛んに参加している。

次は、博士学生であるが、15%程度という割合で、やはり中国からの学生が多いが、東南アジア・中近東・アフリカ・北米など様々な国からの学生がいるという特徴がある。博士学生については、参加義務のある専門科目が少ないので、意外にも多くの学生が日本語コースにアクセスしてくる。学期途中の海外での学会発表や、論文執筆の締め切りの接近などで受講を中断してしまうこともあるが、その一方で、研究生時にゼロかそれに近いレベルでコースに入り、3年間かけて順調に各コースをクリアし、課程終了時は上級レベルにまで達する学生も存在する。

上記で述べた学部・修士・博士の学生以外の残りの15%程度は、協定校からの交換留学生（中国・ペルーが中心）、研究生（中国が中心）である。このカテゴリーは、「短い期間で専門も日本語も学ぶ」「大学院入試に合格できる日本語力をつける」など目的がはっきりしているためか、ほぼ全員が日本語コースに参加しており、学習態度も真面目で熱心である。

以上を簡単に表にまとめておく。

表1 桐生キャンパスの留学生の特徴（属性別）

属性	全体数	コース参加	国籍
学部生	多い	消極的	マレーシア・ベトナム・中国等
修士学生	多い	積極的	中国が多数、その他ベトナム等
博士学生	少ない	積極的	中国が多数、多国籍
交換留学生	少ない	積極的	中国・ペルー中心（協定校より）
研究生	少ない	積極的	中国が多数

3. 桐生キャンパス開講の日本語コース

国際教育・研究センターでは、桐生キャンパスにおいて、日本語コースを前期・後期それぞれ15週の補講という形で提供しており、単位認定は行っていない。しかし、それにも関わらず毎年60名以上、多い時には90名もの学生が受講登録を行っており、留学生への認知度・浸透度は高いと推測される。

具体的には、J1～J5までのレベル別の5コースに、BJ（ビジネス日本語）コースを合わせた計6コースが用意され、学生の日本語レベルや学習ニーズに基づいてカリキュラムが設計されている。

すべてのコースに共通する目標は、「コミュニケーションの相手に不快感を与えずに効率的に伝達の目標を達成することができる言語能力・副言語能力の養成」である。ここでいう「副言語」とは、イントネーション・ポーズ・声の強弱・声の高低などの言語表現に伴う音声的な要素のことで、それにより一定の情報を伝達するものである。

以下では、コースを大きく3つに分けて、簡単に紹介する。

3.1 初級コース

J1（初級前半）・J2（初級後半）のコースは、日本で生活する上で、最低限必要となる基礎的な日本語を学ぶコースで、各コースにつき週4～5コマが設定されている。これらのコースは、1冊のテキストを半期かけて積み上げ式で学ぶため、各コマの内容が連続しており、すべてをセットで受講することが参加の条件となっている。このコースの主要なメンバーは、来日したばかりの交換留学生や研究生、博士学生である。

なお、J1・J2のコースは、一般の学生向けではあるが、一方で文科省の国費奨学金受給学生のための入学前予備教育コースの役割も果たしている。通常、他大学の予備教育コースでは、週10～15コマを15週行い、半年で初級の内容全てを終える形が標準的であるが、群馬大学では、経費の節減、また、授業の効率化(国費留学生1名のためだけのクラスは効率が悪い)という観点から、J1のコースを代替として活用している。通常の前予備教育コースの半分しか内容を消化できないという点で、国費留学生には不便を強いてしまうことになるが、上記の観点から致し方ないのが現状である。

3.2 中級コース

J3（初中級）・J4（中級前期）・J5（中級後期）は、各コースにつき週に総合2コマ、会話1コマ、作文1コマの構成となっている(2013年度以降は削減予定)。これらは、アラカルト方式で提供されており、1コマのみを選んで受講することも可能である。

これらのコースでは、初級で学んだ生活上最低限必要な日本語をベースとして、授業を受けて発表をしたりレポートを書いたり、また研究室で円滑にコミュニケーションを行ったりするための日本語表現やスキルの習熟を少しずつ図っていく。例えば、会話クラスでは、研究室での指導教員や先輩との対話を想定して依頼をしたり謝罪をしたりするトレーニングを行う。また、作文クラスでは、レポートを書く際に必要となる書きことば的な表現を学び、実際にミニレポートを書いてみるといった活動が取り入れられている。すなわち、これらのコースは、学生が日本でなんとか生活していただくだけでなく、留学生生活を「うまくやっていく」ための日本語能力を高めるものと位置付けられる。


3.3 ビジネス日本語コース

ビジネス日本語コースは、日本企業・日系企業への就職を目指す学生のためのコースである。受講者は日本語能力試験N2合格レベル以上の学生に限定している。前期に会話とライティング、後期にBJT（ビジネス日本語テスト）対策とパブリック・スピーキングのクラスを開講し、高まる学生の就職のニーズに答えている。また、桐生キャンパスでは、上級学習者向けのコースを設置しておらず、結果的にこのコースが最上位となるため、熱心に学び続ける学生の最終到達目標としても機能している。

3.4 日本語コースの全体像

以上、各コースについて簡単な説明を行ったが、2013年前期からは、コマ数が削減される予定のため、J3～J5を構成するコマの内容や数は変更される。2013年度前期のコース全体像（予定）を以下に示す。

表2 2013年度前期の桐生キャンパス日本語コース全体像

	コース名	対象レベル	週当たりクラス数と内容
レベル高  レベル低	BJ コース	上級（ビジネス）	1コマ（会話・ライティング）
	J 5 コース	中級後半	1コマ（総合）
	J 4 コース	中級前半	3コマ（総合・口頭表現・作文）
	J 3 コース	初中級	2コマ（漢字・口頭表現）
	J 2 コース	初級後半	4コマ（基礎日本語）
	J 1 コース	初級前半	5コマ（基礎日本語）

4. 日本語コースにおける工学系留学生の特性を意識した授業デザイン

3節では、桐生キャンパスの日本語コースの概要について述べたが、工学系の留学生は、文系の学生と比較して、授業以外にも、実験やゼミに時間を取られるため、十分な予習・復習が難しい学生が多い。また、大学院生は、国内・海外での研究発表などで1週間程度、場合によっては数ヶ月間授業に出られないこともある。このようなことを克服するため、日本語コースのコーディネーター（コース方針を立て運営する役割）や授業者は、それぞれに工夫を凝らして、授業に取り組んでいる。ここでは、報告者本人が行った工夫の中から2例を紹介する。

4.1 授業内に復習の時間を潤沢に取ったデザイン

上記でも述べたとおり、十分な復習が難しい学生が多いという事情から、初級のJ1とJ2コースでは、1回180分（90分×2コマ）の授業時間のうち、最初の50～60分と時間をたっぷり使って、前回の学習課の内容について多角的に振り返ることにしている。これにより、復習をしていなかった学生

も前課の内容を思い出すことができ、また、そうすることで、今までの蓄積の上に新しい内容を積み上げることが可能となるため、自信を持って、新しい課に臨むことができる。

テキストはJ 1では『日本語初級1大地』、J 2では『日本語初級2大地』を使用しているが、テキストに基づき、前課の復習として以下のことを行っている。

- ①単語リストや絵カードを使って前課の新出単語の発音練習
- ②前課の学習項目を含んだ文5つのディクテーション
- ③前課の会話のオーバーラッピングとシャドーイング
- ④前課の文型練習（口頭）

①は「見て話す」、②では「聞いて書く」、③では「読んで、聞きながら話す」、④では「聞いて話す」あるいは「見て話す」というように、多様なチャネルを用いて、目標とする単語や文型を復習できるようになっている。これにより、数十分かかる復習でも、飽きずに取り組めるようにしている。

4.2 自律的な学習態度を養成するデザイン

先に述べたように、大学院生は、国内・海外での研究発表などで授業に出られないことがある。また、就職活動の時期も、同様に授業を欠席せざるを得ないことがある。そのような学習者のために、教室を離れても、ある程度は自分で自分の能力を向上させる態度を養成することが必要だと考えた。そこで、学習者が自分で練習の機会を設定したり、自分の言語使用を振り返って次に生かしたりする「メタ認知ストラテジー」(Oxford 1990)の養成に焦点を当てたデザインを、ビジネス日本語コースのパブリック・スピーキングの授業で実践している。

具体的なデザインは、衣川（2010）の実践を参考にしており、授業でプレゼンテーションをする前に、今日の目標3つを全員の前で言ってから、発表するというものである。この目標は、例えば「はっきりした発音で話す」「聴衆の顔を見ながら話す」「良い姿勢で話す」などのようなものである。プレゼンテーション終了後は、まず自分で今回設定した目標の達成度がどうだったか振り返り、反省を述べ、聴衆からも目標の達成度についてコメントがある。

このような一連の活動を通して、常に自分のプレゼンテーションを客観的にみつめ計画(Plan)・実行(Do)・点検(Check)・改善(Act)する態度を身に付けることを目指している。また、学生には、授業以外の実際の場面、例えば、研究発表や就職面接でのプレゼンテーションでも、目標を設定して話すように促し、結果について教室で共有するというも行った。これらは、すべて教室外でも自分の言語能力の伸長を図る自律的な学習態度の形成に貢献するものと考えている。

5. 日本語コースの今後

3.4節でも述べたように、2013年前期からは、中級のコースを中心にコマ数が削減される予定である。これは、アジア人財資金構想事業で増加したクラスの整理・統合によるものであるが、時間数が減った中でも、学生の日本語能力の伸長や学習意欲に影響が出ないようなコース運営ができるようセンター側は努力していかなければならない。

日本語を学ぶことは、当然レポートを書いたり、講義を聴いたりといった、専門分野を学習する上で貢献があることは言うまでもない。それ以外にも、研究室やアルバイト先での人間関係を円滑に保つ力や、過酷な就職活動を乗り切っていく力にも大きく関与している。特に、工学系の学生の場合は、日本語力の不足により、これらの遂行に支障をきたし、精神的な問題を抱えたり、退学せざるを得なくなったりするような事態もある。日本語コースはこれらの事態を未然に防ぐ役目を担っている。その傍証として、センターが行っている留学生相談の利用者が、アジア人財でコースが増加した2007年以降、減少しているということが挙げられる。

また、日本語コースが質量ともに揃っていることは、留学生、特に修士・博士の大学院生の獲得にも益のあることである。実際、先輩や知り合いから「日本語を勉強できる環境も整っている」と聞き留学を決めた学生がいる。また、交換留学期間に受講した日本語コースで効果を実感し、修士学生として入学後も、授業の合間を縫ってコースに熱心に参加する学生もおり、日本語コースの存在は今後優秀な留学生を引き付ける1つの手段となる可能性を秘めていると考える。

我々担当教員も、この日本語コースのもたらす様々な効果をしっかり意識して、今後の運営にあたっていくつもりである。

参考文献

- 衣川隆生 (2010)「モニタリングの基準の意識化を促進させるための協働学習のあり方」『日本語教育方法研究会誌』, Vol. 17, No.1, pp.36-37.
- Oxford, R. (1990) *Language learning strategies : What every teacher should know*. New York : Newbury House.
- (穴戸通庸・伴紀子訳 (1994)『言語学習ストラテジー 外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社)